

## 1. むらづくりの主体

(1) 名 称 沢野ごぼう事業協同組合

(2) 所在地 石川県七尾市沢野町ケ部42

(3) 地区の規模 集落

(4) 組織の性格 地縁的な集団

(5) 代表者の氏名(敬称略)、役職

氏名：中川 武伸

役職：理事長

## 2. 地区の概要

総人口	農(林、漁)業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
235 人	15 人	73 戸	409 ha	21 ha	- ha	269 ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第 種兼業農家	第 種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
24 戸	14 戸	3 戸 (21.4%)	2 戸 (14.3%)	9 戸 (64.3%)	1 戸 (7.2%)	3 戸 (21.4%)	10 戸 (71.4%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
農振：- 森林：平成17年度 都市計画：無 その他：半島			市 町 村		当 該 地 区		
			中間農業地域		中間農業地域		

### 3. むらづくりの内容及び成果

#### (1) 地域の沿革と概要

沢野集落は、能登半島七尾市の東部山間地に位置する中山間地域で、住居や田畑は溪流に沿って棚田状に広がっており、集落の入り口には、国道160号線が東西に走っている。

集落の世帯数は73戸、人口は235人で、高齢化、少子化が顕著である典型的な中山間地である。農業は水稻単作で、1戸当たりの平均水稻耕作面積は0.5haと零細な経営基盤である。

#### (2) むらづくりの動機、背景

##### ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

沢野ごぼうは、沢野地区の粘土質の土壤で栽培され、通常のごぼうより太く長く（直径3cm以上、長さ70cm以上）、食感や風味に優れたごぼうである。沢野ごぼうの歴史は古く、当地の婆谷（ばたん）神社の神主が京都から取り寄せた3粒の種を村民に栽培させたのが始まりと言われている。江戸時代の書物「産物調書」（1764年）にもその名が記載されており、加賀百万石の名産品として将軍家へ献上されていた。

沢野地区は、耕地のほとんどが棚田で区画が10a以下であり、耕作中の水田が17ha、休耕田が1ha、畑地が4haとなっている。水稻の担い手は高齢者が中心であり、50代以下は七尾市中心部で働いており、農業を手伝う機会は少なかった。ごぼうは高齢者を中心に栽培してきたが、自家消費や親戚へ贈答する程度であり、また収穫作業が重労働であることから、生産量は減少していた。ごぼうは、昭和40年代までは周辺集落を含め100戸の農家で栽培されていたものの、市場価格の低迷により、栽培農家は減少の一途を辿っていた。

地域の高齢化・過疎化に危機感を感じた有志が、平成15年に由緒ある沢野ごぼうを核に、むらおこしを図ろうと立ち上がり、任意団体である「沢野ごぼう生産組合」を発足させ、平成18年には中小企業等協同組合「沢野ごぼう事業協同組合」を設立した。沢野ごぼう事業協同組合は、沢野ごぼうの生産から販売、イベントの開催、グリーンツーリズム、加工食品開発に取り組んでいる。

##### イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

沢野ごぼう事業協同組合は8名の出資により構成され、年齢構成は50代が中心である。集落との間の合意形成については、集落の役員と組合の役員を兼務している人が多く、スムーズに行われている。平成15年からは、沢野ごぼう事業協同組合が核となり沢野ごぼうまつりを開催している。ごぼうまつりでは、ごぼうの販売やごぼう料理がふるまわれるほか、バンドや太鼓の生演奏、ごぼうの品評会といったイベントも開催されている。また、人のネットワークを広げ、周辺地域とも一緒になって活性化を図りたいとの思いから、平成17年からは、七尾市役所、公民館、地元集落、近隣集落（殿町、岡町、湯川町）、農業協同組合、漁業協同組合、青壮年団、婦人部へ働きかけ共同で開催している。



図1 位置図

沢野ごぼう事業協同組合ではグリーンツーリズムによる都市交流にも取り組んでおり、体験交流施設を拠点に、旅行業者と共同でツアーを企画し、外国人や都市住民を招き入れ、ごぼうの播種体験及び収穫体験を実施したり、農家レストランにて、ごぼう料理を提供している。また、沢野ごぼうのブランド化を推進するため、ロゴマークを作成し、商標を取得した。この商標は、沢野ごぼうの商品やPRパンフレットにて活用している。また、平成19年にはホームページを立ち上げ、沢野集落や沢野ごぼうの魅力を紹介している。



写真1 沢野ごぼうまつりの開催

### (3) むらづくりの推進体制

#### ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

沢野ごぼう事業協同組合では、毎月1回を基本に役員会を開催している。組合の役員の構成は、理事長を筆頭に副理事長1名、理事2名、監事1名の合計5名で構成される。集落と沢野ごぼう事業協同組合は連携し、実証園の設置 優良系統の種子の選抜 伝統料理の継承とごぼうを利用した新商品の開発 消費者との交流事業の展開 集落住民の意識改革 宣伝活動の取組みを行っている。

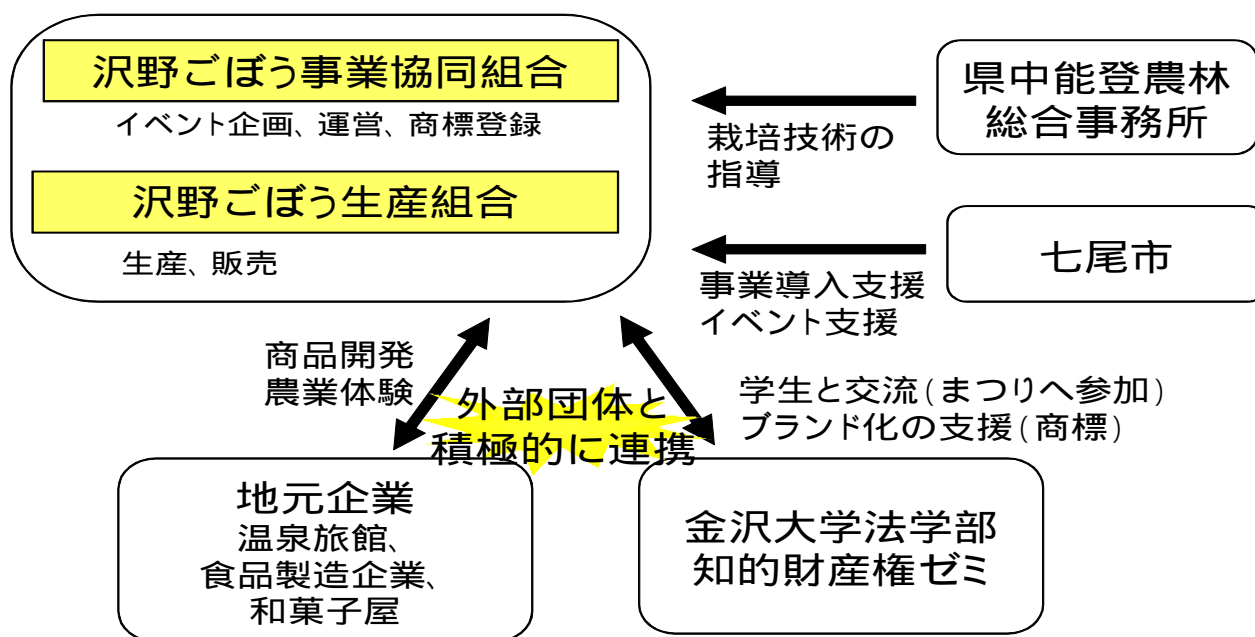


図2 むらづくり推進体制図

#### イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

沢野ごぼう事業協同組合は、地元の町内会や公民館と連携し、七尾市の支援を受けながら、ごぼうまつりやグリーンツーリズムなどのイベントを実施している。栽培面では、中能登農林総合事務所の支援を受け、栽培技術の向上を図っている。

#### ウ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係

## 及び参加状況等

沢野集落では、ごぼうまつりに積極的に参加するとともに、金沢大学の学生とは、ごぼうの収穫体験やごぼうまつりを通じて交流し、若い世代の農業への理解を深めることにつながっている。

また、沢野ごぼう事業協同組合では、沢野ごぼうのブランド化を推進するため金沢大学の学生に協力をしてもらい、商標登録やホームページを作成した。一方、沢野ごぼう事業協同組合の組合員には金沢大学より里山駐村研究員の委嘱を受け、里山研究に協力している者もいる。



写真2 ロゴマークの商標登録

## (4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

### ア 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

沢野ごぼうの復活を目指し、ごぼうまつりやグリーンツーリズムなどのむらおこし活動に取り組んだ結果、集落外から年間延べ1,500人が沢野集落に訪れるようになった。「沢野ごぼう」の知名度が上がるに従い、沢野ごぼうは高値で取引されるようになり、農業所得向上につながっている。

高値で売れることによりごぼうの生産販売は高齢者の生き甲斐になるとともに、農業に関心のなかった中年層もごぼうを栽培するようになり、ごぼうの栽培面積は増加した。

沢野ごぼうは、七尾市内の能登食祭市場やJ Aの直売所で販売しており観光客や七尾市民に販売するほか、地元食品加工メーカーや温泉旅館とも直接取引を行っている。

### イ 当該集団等による生産性の向上、農地の有効利用の促進、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

これまで、ごぼうの収穫は、腰に縄を巻き付けてごぼうを引っ張り抜いていたほど、掘取りに大変な労力をかけていたが、組合がトレンチャー（深耕掘削機）を導入することで、作業労力を大幅に削減した。

また、ごぼうの需要増加に対応するため、順次耕作放棄地を整地し、供給の安定化に努めている。

### ウ 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、担い手の育成・確保、女性の経営参画の改善の促進状況

「沢野ごぼう」を核にしたむらおこしの企画は沢野ごぼう事業協同組合の役員を中心に行っているが、高齢者はごぼうの生産を担い、女性は農家レストランで料理を提供するなど、集落全員が役割を担うことで、集落の一体感が生まれ結束が強まっている。また、若い世代は休日には集落の行事に参加し、沢野集落を担っていく次の世代が育っている。

### エ 地域農林業漁業の持続的発展のための取組等

ごぼうの収穫は11月に限定されることから、沢野ごぼうを一年中味わってもらうため、菓子製造業者と連携し和菓子を商品化した。また、これまで食べられていなかった

たごぼうの葉に注目し、食品加工業者と連携し葉の粉末を練り込んだ素麺を開発し販売している。

素麺の原料となるごぼうの葉の生産は、沢野集落だけでは不足したため、渓流沿いの近隣集落に依頼した。ごぼうの葉の収穫作業は、ごぼうの根の収穫作業と比較して、軽作業であるため、条件不利な中山間地の新たな収入源として、近隣集落の高齢者に喜ばれている。さらに、近隣集落の女性加工グループと連携し、ごぼうの葉入りクッキーや切り餅の商品化も行い、周辺集落も巻き込んだむらおこしに発展している。



写真3 沢野ごぼうギフトセット

## (5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

### ア 当該集団等の生活・環境整備面の取組状況

集落の公民館は、老朽化していたが、打ち合わせなどの利用頻度が向上したため、今後も継続的に利用できようとして改修工事を行った。

地震や集中豪雨により崩壊した水田の畦畔や貯水池を以前ならば、そのまま放置することが多かったが、農村を維持するという意識が生まれたため、復旧工事を行うようになった。

年に2回、集落住民総出で、道路、農道、水路のゴミ拾い、除草作業を行い、景観の美化に努めている。

### イ 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、地域資源の保全・活用、都市住民との交流等への寄与状況

農家レストランを開店することにより、都市住民を自宅に招く機会が増え、古い木造住宅を評価してもらうことで、自宅に対する価値観が変わった。これまで、ほとんど使われていなかった座敷を手入れしたり、いろりを再び使用したり、家の改修工事を行い、古い住宅を保全する住民も現れた。

地域住民の共同意識の目覚めは、約70年ぶりに左義長の復活を促し、地域のコミュニティはますます強化されている。

沢野ごぼうを核にしたむらおこしに取り組む中で、七尾市街地の住民との交流が活発になり、ボランティアがごぼう畑の草むしりやグリーンツーリズムを手伝うようになっている。グリーンツーリズムには、県内外の住民が訪れ、さらに旅行業者と連携して外国人の受け入れを行っている。平成20年には、約400人の外国人が訪れ、日本の古き良き農村文化を体験している。



写真4 ごぼうの収穫体験

ウ 当該集団等の活動による地域への定住促進、女性の活動、高齢者の生きがい活動その他多様な主体の参画した活動状況

これまで七尾市街地に移住する人が多く、人口の流出が続いていたが、むらおこしにより人口流出が止まっている。集落を離れた人が再び戻ってきたり、外国からお嫁さんが1人来て、ごぼう栽培を手伝うなど、明るい話題もある。

「沢野ごぼうの七日炊き」は、沢野に古くから伝わる料理であり、ごぼうまつりや農家レストランにおいて、女性が全面的に協力して提供している。



写真5

高齢者は、ごぼうまつりで沢野ごぼうや野菜を販売するため、農作業に再び力を入れるようになり、畑仕事に生き甲斐を感じるようになり、集落に活気が戻ってきた。